

橘為仲集における二、三の問題

A Few Questions on Tachibana Tamenaka Shu

久保木 哲 夫
KUBOKI Tetsuo

一

長いこと「伝西行筆佚名家集切」と呼ばれていて所属不明だった古筆切が、実は為仲集の断簡であつたことがわかり、一般に流布している群書類従本為仲集は、Ⅰ類本系(甲本)とⅡ類本系(乙本)と呼ばれる異なつた系統の本文が合体されたもので、古筆切はそのⅠ類本系の祖本から切り出されたものであることが明らかになつたのは一九七一年。しかも宮内庁書陵部には、Ⅰ類本系為仲集(一五〇・五六八)と、Ⅱ類本系為仲集(五〇一・三三八)とがそれぞれ単独で蔵されていて、Ⅰ類本系為仲集(一五〇・五六八)の方は群書類従本のⅠ類本系より歌数が一二首も多く、ずつとすぐれているということもその際明らかになつた。そんな小論¹以前、為仲集に関して論

じられた研究には、群書類従本をもとにした犬養廉「橘為仲集とその集—古代末期の歌人像—」²(一九五八年 以下、犬養論文と略称)だけだつたのだが、その後、急速に研究が進み、石井文夫『橘為仲集全釈』³(以下、石井『全釈』と略称)が一九八七年、高重久美『橘為仲朝臣集』における問題—編年性をめぐって—⁴(以下、高重論文と略称)が一九八九年、好村友江・中嶋真理子・目加田さくを『橘為仲朝臣集全釈』⁵(以下、目加田他『全釈』と略称)が一九九八年とつづいた。

そしてわれわれを驚かせたのが伝西行筆本原本の出現である。書道雑誌「書学」500号の特集として、久曾神昇による解説とともに全文が影印紹介されたのが一九九一年⁶、これはのちに思文閣出版によって非常に精巧な複製本として片桐洋一の解説つきで出版されるのだが⁷、為仲集研究においてはまさに画期的な出来事で

あった。

さらに冷泉家の書庫から二点の為仲集が現れたのにも驚かされた。一点は『平安私家集 十』所収本⁸で、もう一点は『平安私家集 十二』所収本⁹である。内容的には書陵部蔵の二点とまったく同じもので、書陵部蔵本の親本であることも明らかにした。

現在知られている古筆切は全部で六葉。現存本のどこに収まるのかはつきりしないのがそのうち三葉もあり、その前後に収まると思われるものや、Ⅰ類本系の本文のみにあつて古筆切も伝わっていないものなども含めると、本来はもつとずっと古筆切の数は多かったはずで、為仲集の本文としてはまだまだ決して完全とは言えないのだが、それでも以前に較べると非常に整つてきてはいるのである。

家経集や頼実集など、和歌六人党やその周辺の歌人達の家集を最近若い人たちと読む機会があつて、改めて為仲集も丁寧に読みなおす必要が生じた。解釈面では石井『全釈』が記録類まで丹念に調べてやはり非常に有用だと思つたし、高重論文における錯簡説などもなるほどと思わせるものがあつて、興味深かつた。しかしまだまだ、Ⅰ、Ⅱ類本系ともに問題は多い、とも思つた。その一つはⅠ類本系における冒頭部の問題である。

二

その冒頭部は、まず、

すなはちたちなから

さくらはなをりよくにほふは
るならはかせにも人のかくと

つけきや 又朝久

ちらすなとつけしと思ふさ
くらはなかせものつけき、み
かみよには

かへす

ふくかせのゝつけきよとは見ゆれと
とあり、群書類従本にはわざわざ「始闕」という注が施されている。明らかに冒頭部が欠けているのである。ところが書陵部蔵本(二五〇・五六八)では(のちに出てきた冷泉家本でも同じだが)冒頭部の欠そのものに変わりはないけれど、

すなはちたちなからかへす

さくらはなをりよくにほふは
るならはかせにも人のかくと
つけきや 又朝久
ちらすなとつけしと思ふさ
くらはなかせものつけき、み
かみよには

又かへす

ふくかせのゝつけきよとは見ゆれと
とあり、傍線部の「かへす」や「又」がある。疑問に思つていたところ、新出の伝西行筆本も同じように欠けていて疑問がさらに深まった。ところが複製本が出るに及んでその疑問は解消された。当該解説によると、書道雑誌における影印ではもちろん、複製本段階でも言われてみないとわからないほどだが、その箇所をわずかながら擦り消された跡があるのだという。要するに冒頭部を切断したた

めに生じた内容的な不自然さを糊塗するための所為、ということになるのだろう。

先に述べたように、現存古筆切六葉のうち、切断位置のはつきりしないのが三葉もあるが、そのうちの一葉、

七条にて

けさよりそ見るへかりける山

さくらくれゆくほとはしつ心

なし

はないまたみたすとう□□

院にて

さきそむるけしきにしるき

さくらはなさかりほとそまた

きゆかしき

は、現存冒頭のさらに前に位置するのであろうと高重論文は推定する。同じような桜詠なのでその可能性はあり得るが、高重論文が推定するように現存の一オに直接つづくとはとても思えない。高重論文では、古筆切の末尾にある「咲きそむるけしきにしるき桜花……」が朝久詠で（朝久なる人物については未詳だが）、

朝久が為仲を桜花たとえて彼が司を得てたことを祝い、未来への期待を示しているのではないだろうか。

とし、現存冒頭部の「桜花折よく匂ふ春ならば」をその返歌とする。しかしこれはかなり無理がある。まず、現存冒頭部には唐突に「朝久」なる人物が出てくるが、ここにはたまたま「又」が消えずに残されている。「朝久」なる人物はすでに一度は登場しているはずなのに、その部分がない。書誌的にもかなり不自然である。伝西行筆

本は薄様の素紙による袋綴装で、もし「七条にて」の断簡が冒頭なら、必ずそのウラの部分があるはずで、冒頭部分がウラから書きはじめることは通常考えられないからである。そのウラの部分に、もしかしたら「朝久」なる人物が登場していたかもしれないのである。またもし「七条にて」の断簡が冒頭部分でなかったら、「朝久」の登場部分を含めて、さらに二葉以上の逸失部分を冒頭部分に考えなくてはならないだろう。現存Ⅰ類本は伝西行筆本が出現してもなお問題が残るのである。

三

次に問題となるのは配列である。犬養論文はⅠ類本について、部立なく、その排列に多少の群落は見られるが、淡路任国の詠が断続する如く、年次を追ったものでもない。詞書の表記に一貫性のないことと共に、本集が雑纂未整理の域を脱しないことを示すものである。

といい、それに対して高重論文は、

メモ的雑纂的なものでなく、為仲自身が正確に編年構成した整理本と言えるだろう。

とまったく正反対の意見を述べて、1番歌から最終の104番歌までを、永承五（一〇五〇）年の春から天喜六（一〇五八）年の夏まで並べ、詠歌年次の一覧表まで作成して見せる。

しかし具体的に作品を調べてみると、年次については実ははつきりしないものの方が多いのである。いつ、と断定できるのはわずかなが、たとえば（適宜漢字をあて、表記は歴史的仮名遣いに改める）、

閏七月七夕^(マツ)

28彗星は過ぎにし あやなく今宵妻や待つらむ

是天喜元(一〇五三)年閏七月七日で、

閏三月ある年の三月尽くるに、春、閏余りあり、といふ題を

69常ならば今日まで見まし春霞いま一重さへ立ちや添ふらむ
が天喜四年三月末日、といった程度である。その他、類推可能な歌が何首かあるが、最も問題となるのは、

殿の歌合の後朝の暁に、歌合の歌を書きて中宮の出羽弁の
もとへやるとて

6五月闇くらべて見つる言の葉をつきなき人ぞまづ散らしける

である。石井『全釈』も目加田他『全釈』もこれを長元八(二〇三五)年五月十六日に行われた賀陽院水閣歌合(『歌合大成』一二三)のこととするが、高重論文は永承五(二〇五〇)年六月五日に行われた祐子内親王歌合(『歌合大成』一四二)であろうとする。犬養論文は、

水閣歌合に為仲が出席した形跡がなく、また参加していたとしても、出羽弁とは特に親交の見られる経家・経信の連なる席から、当時なお弱輩の彼が歌を送るのは不審である。

として、頼通邸で行われた現存しない小規模な歌合であろうかとする。

問題は、明確な編年構成をとる高重論文だが、祐子内親王歌合とする理由が特に述べられているわけではない。冒頭の歌群を永承五年とした上で、

詠歌時を永承五年とするのは、後に続く六番詞書「殿の歌合」を「殿」頼通が孫祐子内親王のために催した「永承五年六月五

日庚申祐子内親王歌合」と推定するからである。

と述べるのみである。6番の歌を「祐子内親王歌合」と「推定」する理由が特に述べられているわけではない。その6番の歌を「永承五年」と「推定」するから、1番から5番までの歌は「永承五年」だ、という論法なのである。しかしこれはおかしい。「事実」を根拠とする「推定」ではなく、「推定」を根拠とする「推定」は単なる妄想に過ぎないだろう。

しかも6番の歌には「五月闇くらべて見つる言の葉を」とあり、問題の「祐子内親王歌合」の開催日は「永承五年六月五日」なのである。「六月五日」に行われた歌合の際に「五月闇」と詠むことは絶対にあり得ない。この一事だけでも高重説は成り立たず、全体を「正確に編年構成した整理本」と断定することには無理があらうかと思われる。

18番における「尾張守俊綱」も問題である。宇治拾遺物語によれば俊綱は「十五にて尾張守になし給ひてけり」とあり、それを信ずれば彼の尾張守の時代は長久三(一〇四二)年から寛徳三(一〇四六)年までの四年間、ということになる。俊綱は実の父親が関白頼通で、どういう事情からか橘俊遠の養子となった人物だが、父親が頼通であるにしても十五歳での任官はあまりにも若すぎ、その記述をどこまで信用していいかという問題は確かにある。ところが高重説ではこれを永承六(一〇五二)年の秋とする。根拠とする理由が「為仲集の配列」では、やはり論証の仕方が逆なように思う。

もっともその「尾張守俊綱」が、38番と64番では「丹波守俊綱」となっていて、自然な形で時の流れを感じさせる姿になっていたり、先述した天喜元(一〇五三)年閏七月七日に詠まれたことの明

らかな、

閏七月七夕

28彦星は過ぎにし(マ) あやなく今宵妻や待つらむ

が、実は四条宮下野集(二九)にもあつて、28番歌の前の、

五節のころ、内裏にて、月の明かきに、女房の局の前にて
かく言ひし

27 a 月こそ豊の明かりなりけれ

本を、宮の下野

b ひかげにも立ちまさりつつ雲の上は

も、やはり下野集(二〇)にあることから、石井『全釈』は、下野集の配列は原則年代順なので、27番は28番以前の詠であることは明らかであり、しかも永承五年の寛子の入内以後ということになれば、永承六年か七年に限定されるだろう、さらに「五節の中の夜」は永承六年の場合は十一月十九日、永承七年の場合は十一月十三日、「月の明かき」夜は十三日のほうが蓋然性が高いのではないかとする。永承七(一〇五二)年は天喜元年の前年なので、ここは完全に年次順であることが立証されることにはなる。

従つて大きな流れや、部分的には年次順であると立証されるところもあるのだが、それを言うためには確実な根拠と、右のような複雑な証拠固めとが絶対に必要なのだと思う。

四

Ⅱ類本の配列はどうか。犬養論文は、

略々正確に年次排列された整理本である。

とする。Ⅰ類本は一部に淡路守として淡路赴任の記述があるものの、ほとんどが四条宮寛子のもとでの記録であるのに対し、Ⅱ類本は、宇佐の使い、越後守、陸奥守としての旅の記録が延々とつづく。従つて確かに年次配列の傾向は著しいのだが、果たしてすべてが「正確に」と言えるかどうか。

たとえば、越後在任中に信濃旅行などもしているらしく、10番「小川の社」、13番「都井といふところ」、14番「園原を発ちて、御坂を過ぐとて」、15番「姨捨山の月を見て」などがあるが、そのうち少なくとも15番は単なる信濃旅行ではなく、都への帰任の旅だったようだからである。15番には、

姨捨山の月を見て

これやこの月見るたびに思ひ出づる姨捨山の麓なるらむ

とあり、これは後拾遺集(羈旅、五三三)にも採られていて、ここでは、越後、よりの、ぼりけるに、姨捨山のもとに月明かりければ

橘為仲朝臣

これやこの月見るたびに思ひやる姨捨山の麓なりける

とある。後拾遺集は撰者通俊が承保二(一〇七五)年に勅宣を受け、実際に出来上がったのが応徳三(一〇八六)年、為仲はその前年の応徳二年に亡くなつてはいるが、編集作業そのものは為仲の生存中に行われているはずなので、為仲に関する記述はまず間違いないものであると思われる。その後拾遺集に「越後よりのぼりけるに」とあるのである。ところが為仲集の16番に、

越後にて、正月七日、雪降りたるを見て

雪深き越路は春も知らねども今日春日野は若菜摘むらむ
と、ふたたび越後在任中の歌が配されている。17番では、

京に上りて、四月十一日、稲荷に詣りてはべるに、杉の上
にほととぎすの鳴くを聞きはべりて

卯の花の垣根ならねどほととぎす杉むらにてぞ初音聞きつる
と完全に都に戻った歌になるのだが、このあたり「正確に年次排列
された整理本」とは言いがたいように思われる。

宇佐の使いや陸奥守として赴任の旅はさすがに旅程どおりに配列
されており、陸奥在任中の詠も特に問題となるところはないが、家
集末尾の、

月前述懐といふ心を

67 かくしつ世を経て見つる秋の月いま幾年かあらむとすらむ

秋深月明

68 秋深くなりゆく空のさやけきは月の影にも霜や置くらむ

芦間の薄氷

69 水鳥のあるに障らぬ薄氷芦間やしばし消え残るらむ

白河院にて、関路郭公、といふ心を

70 東路に言つてやせしほととぎす関の石門いまぞ過ぐなる

は題詠歌ばかりが並んでいる。あるいはあとから付加された部分な
のかもしれないが、

67 番の「月前述懐」という題では、後拾遺集（雑一、八五三）に、

月の前に懐ひを述べといふ心をよみ侍りける

藤原実綱朝臣

いつとても変はらぬ秋の月見ればただいにしへの空ぞ恋ひしき
があり、69 番の「芦間の薄氷」は、四条宮下野集一四一番に、

五節近くなりて里にまかでて、歌詠む人々に題を範永して
やらせて、清げなるほどにひきつくるひて待てば、人々来集

まり、経衡、人より疾く来て居たる。……

という長い詞書があって、「庭の小草雪をいたたく」「芦間の薄氷」
「炭竈」などの題を下野が提出し、歌人たちが歌を詠みあっている。

前者の「藤原実綱朝臣」は、先述した18、19 番に、

陸奥守になりて下らむとし侍りしに、式部大輔実綱が七条
の泉にて別れ惜しみ侍りしに

過ぎ来たる心は人も忘れじな衣の関をたちかへるまで

李部郎藤原実綱

人はいさわが世は末になりぬればまた逢坂をいかが待つべき
にあることや、55、56 番に、

式部大輔実綱朝臣がもとへつかはす

朝夕に結びしものを相見ても五年までになりけるかな

返し

実綱朝臣

老いにける人のためには五年も積もれば残り少なりけり
などとあつて、為仲とは非常に親しくつきあっていた人物であるこ
とに違いないのだが、為仲の帰任する前の永保二（一〇八二）年
には没しているのも、もし同時詠ならかなり前、為仲の陸奥守就任
以前ということになるだろう。

また後者については、下野が同じ四条宮寛子のもとに仕えていた
いわば同僚で、為仲は下野集で最も頻繁に登場する仲のよさでもあ
る。たまたま当該章段に為仲の名はなく、範永、経衡、資良などだ
けだが、題は下野の提案であり、下野の自宅で行われた歌会でもあ
る。下野が「歌詠む人々に題を範永してやらせて」とあるので、そ
の折、間違ひなく為仲も詠んだのではないかと思われる。当該歌会
については金子美希『「四条宮下野集」の研究―下野邸歌会につい

て」¹⁰ がくわしく、たとえば範永集乙本の37番には、

芦間の氷薄しといふ題を

難波濁入江の氷薄けれど芦の若葉の陰し隠れず

とあつたり、類題鈔545には、

下野君治曆三十一

庭草戴雪 芦辺薄氷 炭竈

とあつたりする。類題鈔の記述を信ずれば、下野邸での歌会は治曆三(一〇六七)年の十一月ということになるが、歌会の出席者の一人である藤原資良が実は康平七(一〇六四)年には没しているの(永左記)、類題鈔の記述には問題があるという。しかしいずれにしても為仲の越後赴任より前であることは間違いない。

末尾四首はあとから付加されたものであるにしても、Ⅱ類本もまた「略々正確に年次排列された整理本」ではないことになる。

五

為仲の年齢も具体的にはわかっていない。犬養論文が、

彼が六人党歌人と親しく、而も常にその下風に立っていたと思

われること、六人党最年少と目される経衡(延久四没、六八歳、

尊卑分脈)の没後、相当の高齢で陸奥に赴任したこと、

などを挙げ、先に挙げた藤原実綱の19番の歌、

人はいさわが世は末になりぬればまた逢坂をいかがつつべき

から、実綱よりは若かったであろうとして、長和三(一〇一四)年頃の誕生という説が一般に用いられている。藤原実綱は尊卑分脈に「永保二三三三卒 七十一才」とあり、長和元年の生まれなので、

そこから割り出されたものである(ただし諸家系図纂には「永保三三三三卒 七十一才」とあって、その場合は長和二年の生まれとなる)。

「人はいさわが世は末になりぬれば」という口調からは、確かに実綱の方が年長であると思われるが、犬養説のように一、二歳程度の差であろうか。

為仲の陸奥赴任は水左記・承保三(一〇七六)年九月十二日の記述などから、その年の九月十七日であることがほぼ明らかになっている。実綱は六十五歳、為仲は犬養説では六十三歳ということになる。更級日記作者の父菅原孝標が常陸介に任じられたのが六十歳の折だから、さらにそれよりも三歳も年長ということになる。しかも任地は遠い陸奥である。少しトシヨリ過ぎてはいないか。

また、犬養説では「六人党最年少と目される経衡」とあるが、これは明らかに誤りである。石井『全釈』も、六人党の橘義清を為仲の「弟」とするが、これも誤りである。

経衡は、尊卑分脈や勅撰作者部類によれば延久四(一〇七二)年没、六十八歳とあり、没年に関してはなお問題があるようだが¹¹、寛弘二(一〇〇五)年頃の生まれらしいのに対し、頼実は、故侍中左金吾家集(頼実集) 蘆庵本の奥書勘物に、

正四位下右馬頭頼国朝臣二男

長久四年正月九日補藏人所雑色^{廿九}

寛徳元年六月七日卒^{年卅}

とあり、寛徳元(一〇四四)年六月七日に三十歳で夭折しているの、生年は長和四(一〇一五)年ということになり、経衡より十歳ほども若いことになる。

また同じ奥書勘物にはいわゆる六人党の名が記されていて、その

中に、

義清長元六歳人
少納言義通一男

とあり、義清は「少納言義通一男」で、義通の長男であることがわかる。先述した長元八年五月に行われた賀陽院水閣歌合に、父義通は「中宮大進義通朝臣」として左方の方人^{かやのいん}に、長男義清は「藏人式部少丞橘義清」として右方の方人に選ばれているが、為仲の名はない。ただここで注目したいのは、六人党で最も若いと思われる頼実も、すでに「藏人所雑色」として員刺の洲浜や地敷という數物を運んだりして、いわば雑役としてだが、従事していることである。頼実は当時二十一歳。たとえ歌人としてではなくても、義清や頼実はすでに活躍しているのに対して、為仲の名が見られないのはなぜなのか。

さきに掲げた犬養説も問題となる。繰り返すと、

水閣歌合に為仲が出席した形跡がなく、また参加していたとしても、出羽弁とは特に親交の見られる経家・経信の連なる席から、当時なお弱輩の彼が歌を送るのは不審である。

とするのだが、実は経家は寛仁二(一〇一八)年の生まれで、当時十八歳、経信はそれより二年早く、長和五(一〇一六)年の生まれで二十歳なのである。二人とも歌合には右方の方人として出席している。為仲は犬養説によると二十二歳のはず。いわゆる役職と年齢とは直接の関係がないだろうが、少なくとも経家や経信に較べて「当時なお弱輩」ではなかったことになる。

頼実集、七四番に、

長久三年閏九月のつごもりに、関白殿、有馬の湯におはしまして、その間、宮にさぶらふ人々、義清、重成、経衡、

為仲などして、臨^レ池

水の面に四方の山辺も映りつつ鏡と見ゆる池の上かな

とあるのも興味深い。関白頼通が有馬に湯治に出かけたのは長久三年閏九月二十三日で、厳密にいえば「九月のつごもり」ではないが、留守の期間全体を通していえるは「つごもり」となるであろうか。百鍊抄によれば、

同廿三日、関白左大臣下^二向有馬温泉^一、廿七日、遣^二勅使左衛門権佐泰憲^一問^二所勞^一

とある。その留守の間、宮(後三条天皇皇女である祐子内親王であろう。母嫺子亡きあと頼通に養われていた。当時五歳)に仕えていた人たちが歌を詠みあった。メンバーは、義清、重成、経衡、為仲などであったという。為仲としては、年次の確かな形での登場ははじめてである。

当該家集の主で、「水の面に」の作者頼実は、当時二十八歳。為仲は犬養説では二十九歳となる。為仲が当初和歌六人党のメンバーではなく、袋草紙に、

江記に云はく、往年六人党あり。範永・棟仲・頼実・兼長・経衡・頼家等なり。頼家に至りては、かの党頗るこれを思ひかたぶく。範永曰はく、兼長は常に佳境に到るの疑ひあり。また云はく、俊兼の曰はく、頼家またこの由を称す。為仲、後年奥州より歌を頼家のもとに送る。歌の心を遺すところの人は君と我となり、と云々。頼家怒りて曰はく、為仲はそのかみこの六人に入らず。君と我と生き遺るの由を称せしむるは安からざる事なり、と云々。

とあるのは有名だが、歌人としての力量の問題というよりも、頼実などにくらべて彼の方が若かったからではないのか。少なくともあ

と二、三年後、寛仁元年ごろの誕生と考えた方が、あまり無理なく、すべてが説明できるように思われる。

六

家集は、当然のことだが、それぞれの歌人の歌の集積である。他人詠も混じることもあるが、それは原則として贈答歌の場合、と考えていいだろう。たとえばⅠ類本の50番、

月水を照らす、この歌は、九月十三日の夜に、頭中將、右の馬頭経信の君の六条の家にて詠みし、勘解由次官明衡が題なり

行く水の音せざりせば月影をまだきぬにけるつらとや見む
については、石井『全釈』も目加田他『全釈』も歌の作者を頭中將と解して、為仲はかわつていない形に考えているし、犬養論文もそれを前提に論を進めている。しかし石井『全釈』は、47番の、

水風始秋 皇太后宮の亮公基が六条にて、人々詠みし

川風に吹き返さるる衣手は秋来てのちの心地こそすれ

と同じ言い方で、「頭中將がよんだ時に（為仲が）よんだ歌、というつもりで、こういつているものとみるのがいいか」とも言っている。為仲の家集なのだから当然そう解すべきであろうと思われる。47番以外でも、

件の二首、宮のさぶらひにて、人々詠みし（55番）

雲林院の菩提講聞くついでに、人々詠みし（62番）

もみぢ、山に残る、宮の女房の宇治に参る日、人々の詠みし（77番）

雨のうちに春を惜しむ、宮のさぶらひにて人々の詠みし
などであるのはすべて同じように為仲詠と考えていいだろう。

（88番）

そのほか、

正月七日、雪の降りたるに、宮の、

58 春日野に雪間かき分け常よりも今日の若菜をいかが摘むらむ
和せる、下野の君

59 若菜にと野辺にも出でじ今日はただ降りつむ雪にまかせてを見む

などは、いかにも宮と下野の贈答であるかのように思われるが、実は四条宮下野集に、

正月七日、雪の降りたるに、為仲、

春日野に雪間かき分け常よりも今朝の若菜をいかに摘むらむ

（六五）

返し

若菜にと野辺にも出でじ今日はただ降りつむ雪にまかせてを見む（六六）

とあって、やはり為仲と下野との贈答であることがわかり、為仲集には何らかの誤りがあるのだと考えられる。そのほかにも問題の箇所はあるけれど、為仲の家集である以上、為仲詠のかかわらないやりとりはない、という原則が、いずれの場合にも適用されるように思われる。

ところがⅡ類本では、そうした原則が当てはまらない歌がかなりある。たとえば、

月日を数へてこそは、尾張、

22 東路あづまぢ

は、為仲が陸奥守赴任が決まってまだ在京中に、尾張という女房から送られた歌だが、記されているのはそれだけで、為仲の応答はない。詞花集(別一八四)には、

橘為仲朝臣陸奥守にて下りけるに、太皇太后宮の台盤所よりとて、誰とはなくて

東路のはるけき道を行き帰りいつか解くべき下紐の関

とあって、作者名無表記だが、勅撰集では一般に作者名無表記の場合は前歌の作者名があらはれることが大原則なので、この場合は当然一八三番の「太皇太后宮甲斐」が該当するかと思われるが、そうすると「太皇太后宮」は四条宮寛子であろうから問題ないとして、「甲斐」と「尾張」とはどういう関係なのか。石井『全釈』は、「甲斐」は金葉集以下の勅撰歌人で、寛治三(一〇八九)年の四条宮扇歌合にも出詠しているのが最も古く、あるいは「尾張」はその前の女房名かもしれないという。しかし同じ詞花集の雑上(二九一)に、

左京大夫顕輔、中宮亮にて侍りける時、下臈に越えらるべしと聞きて、宮の女房の中に嘆き申したりける返り事に、
誰とはなくて

世の中を思ひな入りそ三笠山さしづる月のすまむかぎりとはあり、この場合は前歌が「小一条院御製」なので「誰とはなくて」は文字通り作者不明、というか、敢えて作者名を明らかにしなかったという意味であろうから、一八四番の場合もやはり作者不明という意味だ、とする考え方もある(和歌文学大系版『詞花和歌集』など)。いずれにしても「誰とはなくて」置いたというのは、やはり歌の内容とも関係があるのだろう。「下紐の関」は陸奥国の歌枕で、

宮城県と福島県の県境にあつたという関所だが、その名称から、和歌では、女が男にすべてを許すというような意味で用いられることが多かった。もちろんこは為仲の陸奥赴任に際して、関係する地名を用いたおふぎけではあるが、為仲がどう答えたのか、為仲の家集なのに返歌が記されていない。

雪の降りたるに、行房がもとより、

40 武隈のまつこともなきわが身には年月のみぞゆき積もりぬる
これは陸奥在任中の詠である。行房とは当時の出羽守で、直前に、
正月十日、子の日にあたりたるに、出羽守行房がもとより
38 いとどしく今日を子の日と聞くにこそ末の松山思ひやらるれ
返し

39 問ふ人の子の日ならでも訪れば末の松山われも頼まむ
とあり、贈答がなされている。従ってそのつづきと考えればいいのだが、当然40番に対する返歌もあつたはずなのに、記されていない。また、

大蔵卿長房がもとに、文つかはしたる返事に、
50 沈むともいまはわが身はさもあらばあれ恋しき人を見ぬぞ悲し
き

は、「つかはしたる」はずの為仲の「文」が記されていないし、

実源阿闍梨が、宇治殿の御事など思ひ出でたるにやありけむ、言ひおこせたる

58 知るらめや霞となりてのぼりたる人のすみかの春のけしきを
や、

延任したりと聞きて、兵庫頭隆資がもとより、
59 待つわれはあはれ八十路になりぬるに阿武隈川の遠ざかりぬる

なども、当然為仲の返事があつて然るべきところだろうが、家集には記されていない。

筑紫より時綱が言ひおこせたる

62 めぐり逢はむほどは千歳の秋なれや末の松山生^{いき}の松原

は、やはり時綱詠だけだが、この場合は時綱が肥後守になった折、遙か遠く陸奥から、

源時綱、肥後守になりて下りぬ、と聞きてつかはす

49 われだにもくやしと思ふにまことにや君も遙かにいくの松原と送った歌があるので、大分日時や家集としての位置は隔たっているけれども、その返歌と考えられないこともない。

いづれにしても常の家集の概念からはこれは大きくはずれていると言わざるを得ないだろう。自撰にしる他撰にしる、もし編纂という形で人の手が加わっていたら、まずこうした形にはならなかったのではないか。Ⅱ類本系は、たまたま為仲に関する歌反古群、旅を中心とした、があつて、それがそのままの形で伝わった本文、としか考えられないように思う。

歌の解釈をはじめ、細かな問題は他にもいろいろあるが、以上、家集を理解する上でごく基本的な問題についていくつか考えてみた。

注

- 1 久保木哲夫「『橘為仲集』考」国語と国文学 一九七一・四のち『平安時代私家集の研究』笠間書院に収録。
- 2 犬養廉「橘為仲集とその集―古代末期の歌人像―」国語と国文学 一九五八・一二のち『平安和歌と日記』笠間書院に収録。

- 3 石井文夫『橘為仲集全釈』笠間書院 一九八七・九
- 4 高重久美「『橘為仲朝臣集』における問題―編年性をめぐって―」和歌文学研究 一九八九・一一のち『和歌六人党とその時代』和泉書院に収録。
- 5 好村友江・中嶋眞理子・目加田さくを『橘為仲朝臣集全釈』風間書房 一九九八・四
- 6 久曾神昇「橘為仲朝臣集 西行筆跡」書学 一九九一・一一日本書道教育学会
- 7 『橘為仲朝臣集』解説片桐洋一 思文閣出版 二〇〇三・一〇
- 8 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集 十』朝日新聞社 二〇〇四・八
- 9 冷泉家時雨亭叢書『平安私家集 十二』朝日新聞社 二〇〇八・四
- 10 金子美希「『四条宮下野集』の研究―下野邸歌会について―」国文 二〇一一・七
- 11 増淵勝一「和歌六人党伝考」(『平安朝文学成立の研究 韻文編』国研出版 一九九二)や吉田茂『経衡集全釈』(風間書房 二〇〇二)によれば、経衡集一二五の詞書に「正月七日、周防守通宗のがり言ひやりはべりし」とあり、水左記・承保四(二〇七七)年十月三日の条に「散位藤通宗任周防守」とあることから、承保四年の十月にはまだ生存しており、一二五番歌の詠は「正月」だから、没年は少なくとも翌承暦二(二〇七八)年以降になる、という。

追記

校正段階において、

大塚誠也『『為仲集』乙本における待遇意識・日付・寛子後宮』

日本文学研究ジャーナル 二〇二二・六

なる論考に接した。乙本とは小論におけるⅡ類本のことである。小論とは着眼点も考え方も異なり、もちろん納得できる面も首をかしげざるを得ない面もあるのだが、こうした考え方もあるという意味において、ぜひ参照願いたい。

受領日 二〇二二年四月二五日

受理日 二〇二二年六月 八日